新昌葉集

卷九

昭和十三年九月十六日印刷
昭和十三年九月二十日發行

新萬葉集　第九卷

編纂代表者　山本三生

發行者　山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者　村尾一雄
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌　改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)(自一一二一番至一一二四番

（兩角製本）

目次

―作者別氏名五十音順―

やの部（その二、山邊より）……三
ゆの部……二九
よの部……四九
らの部……一二七
りの部……一二七
ろの部……一二九
わの部……一二九
をの部……一八二
んの部……二一七

を の 部……二二四
拾 遺……三四八
作者略歴……三五三
新萬葉集の完成……山本實彦……四〇一
○裝幀 横山大觀
○題簽 比田井天來

審査員
（五十音順）

太田水穂　北原白秋
窪田空穂　佐佐木信綱
齋藤茂吉　釋迢空
土岐善麿　前田夕暮
與謝野晶子　尾上柴舟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第九卷

山邊習學

白雲は秋のこころに浸るらし空の高きにありてうごかず

山邊定子

見わたしの山はわか葉につつまれて窓に入りくるあさ風もよし

ゆふやけの雲かがよひてやままつの一葉一葉もあざやかに見ゆ

山部きり子

樂しみてのぼり來たりし皿倉の嶺は丈ひくき枯草の山

山見藤吉

松山の松の落葉をふみしめて思はじとしつつものを思へる

山村和壽子

大岩に盡くると見えし溪の徑灌木の林に細々つづく

山村森太郎

籠に摘みし赭き藻草は汽車ぬちに籠の目をもりて磯の香たかき

幾とせぶりに母のたまひし安胡の浦の鹿尾菜をけさは焚きてたうぶる

山村美子

曉の冷えきびしきに目覺めゐて風止みたるは忘れゐたりし

ひねもすを硝子拭きして和ましき今宵電燈の下に爪を切りたり

山村湖四郎

夕光の未だあかるき松山の道の細りに馬酔木咲くなり

山本正子

化粧する鏡の奥に庭さきの銀杏の黄葉ゆれうごくなり

山本初枝

二百三高地にて

此あたり父はたふれて果てにしかほこりの道に草ふみてゆく

上海事變

思ほえず吾子をいだきてうちふしぬ近くに落ちし彈丸のひびきに

路地の中に忍び入りて射つ便衣隊のピストルの音はたゆるまもなし

爆彈の炎あかるき大空を物干しに見しは昨日のごとし

青芝は道にしげれどすぎし日の閘北の町のおもかげはなし

國と國と戰ふことの恐しさを目のあたり見れど言にいひ得ず

悼魯迅先生　二首

若くして學びし日本は戀しけどゆくことなけむといひし君はも

家近く住みしよすがに魯迅先生と語り合ひにし幸や思はむ

小豆畑に臨海學園の旗見えて荒布(あらめ)を干せる道を來にけり

檜植ゑて若葉しげるをたのしみし故郷の山にかへる日なけむ

山本三郎

早引きをせし教へ子は田にありて夕陽を浴びて稻を刈り居り

山本順一郎

八月の陽のてりかへしきびしきに此處ゆ展くる汐の色淺し（新和歌浦）

何時の日かまた越ゆるらむ三熊野の高山の風に思ひを凝らす（矢の川峠）

菊の鉢幾多トラックに積み行きぬ眼に殘りゐる色のすがしさ

山本甚一

讀みさしし本の頁に來てとまるとんぼよ腹の脈打てる見ゆ

山本明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

燒跡に友のむくろを掘りあてしときの間の話聞けば思ほゆ

讃日本書道

古の沙門空海がはかりしれぬ和樣書道に大いなる力あり

歌よみの曙覽言道蓮月尼近世書家の名をとどむべし

山本敏子

谷そこゆ吹上ぐる霧は目に速し巖にあたりて裂くる風おと（信州八ヶ岳）

夕日落ちて樅の樹氷の搖るるおと冷々と蒼き雪の山原

山本賢次

釜掃除に夜を徹して來し我れは光しづかなる峽に疲るる（奥多摩秋川峽）

蘭を植ゑさつきを植ゑて朝に夕に人はしづかに老いに入るらし（親方）

仕舞終へて心ゆるめば何せむや昨日の如くまた眠るべし

湯屋開業の爲十年間住み馴れし親方の家を去る事となれり

日當りに干しし布團のにほひかなし明日よりわれの家に眠らむ

下りたちて今朝は我が焚く釜の前扉を開けてみつ釜古りにけり（開業）

夜更けて戸じまりすれば過ぎし日や人にたより來しわれにあらじか

粗衣粗食におのれつつましき妻とゐて時に誇大のこともわれ言ふ

山本芳助

ゆるされて御垣のうちにおほけなく踏む玉石は音たちにけり（伊勢神宮參拜）

一人にて山深く登ることおほし龍膽の花を見つつし思ふ

川原に降り行きければいち早く幼兒は水に手を浸しけり

一人して夕くれぐれの紀佐谷を宮瀧に向ひ我は下るも

山本義雄

樺太にて

身を病めば晝を佗しく家籠り鋸の目を立つ薄日の庭に

凍の朝丸太引き出す松林馬橇の軋り音の重しも

古の露人の堡壘こはれ居て今はうつぎの花咲きてあり

山本茂登子

釋迦院の山を行きつつ

山にやまの風渓にたにのおと秋ふかき釋迦院の山の山路を行く

山みちはふむに落葉のやはらかさ日ねもすを行けどあかぬ山みち

阿蘇高原にて

高はらの夏草のゆめいまださめずひそけくおりて雲のあそべる

山本龍

秋づきて光り白めるものの影わが身まぢかくよぎるをおぼゆ

童貞にあらざりしなどいふことも君にしてなほすがすがしけれ（年若き友山下隆一逝く）

山本友一

昭和七年六月以降鐵道建設の任を帶び龍江省齊々哈爾に滯在す。時恰も馬占山、李海青等の反亂軍跳梁の折柄なり。鐵道建設現場にては兵匪の毒手を受けし慘死體を凍土の上に探し求め或時は是を銃火のもとにて燒く

彈丸なかに君を葬りの火を守る身はひしがれしごとく地に伏す

銃音に伏せる吾らはときのあひだ君を葬りの火を見ざりけり

頭なきみ骨を持ちてかへり來ぬ君が妻子に何と申さむ

ハンビンにて　二首

ぶるうすをひとたび踊りわかれしが家をも名をも知らざりにけり

流れつく死體おもへばひと冬をこの水上に賊はびこりぬ（松花江岸）

流行歌かなしがりつつ聞く吾は熱き茶碗をてのひらにのす

龍沙公園遠望

群烏すでに巣ごもるゆふつかた楡（にれ）の根がたに靄しづまりぬ

機上吟。齊々哈爾を發し興安嶺にむかふ

白雲の土につくなすはたてまで山ぞとおもふ起伏しは無し

通信筒しげる草生に落ちゆきていなごのごとし兵かけゆくは

しぐれゐる水上の水たぎつ見て吾が機アルシヤンのかたに高まる

嫩江岸

かりがねのひくくわたれる水の上へはしばしうつろふ夕あかね空

偶感

しあはせはこころにありと聖(ひじり)だにおよそ食足りて言ひしにやあらむ

洮兒河所見　一首

濁り波しづかにうてる洲の上にむら鷺はゐて一羽なほとぶ
宵闇のしばらくにしてのぼりたる月さし入りて寒し疊は
せまり來て寂しけれどもたわやめの肌(はだへ)にふるることなかりけり

興安山中吟

越ゆる山見えくる山にさしとほり光は寂し樹々の間の雪
喇嘛僧がをとめを犯すならはしもむしろ羨(とも)しとあひ語りけり
牛を追ひてかへりし犬をかき抱きもの言ひやめず老いし移住民

仲秋吟

水脈(みを)ひきて立ちしかりがねひとつらに高くぞなりぬ葦原の上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com